様式 C-7-2

自己評価報告書

平成２３年４月１５日現在

機関番号：25406
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2008～2011
課題番号：20530522
研究課題名（和文）認知症者の実用的な読み能力に関する評価法の開発とケアへの応用

研究課題名（英文）The Development of a Reading Test for People with Dementia and its Clinical Application

研究代表者
本多　留美（HONDA RUMI）
県立広島大学・保健福祉学部・准教授
研究者番号：10290553

研究分野：言語障害学
科研費の分科・細目：社会学・社会福祉学
キーワード：認知症、音読能力、読解能力、実用性、会話

１．研究計画の概要

認知症者が､残された心身の力を発揮し、安全に、自立した生活を送るためのケアの道具として、文字などの視覚的素材を適切に使用できるようになることを目的としている。

(1) 認知症ケアに文字刺激（文字で書かれた単語や短い文による補助具：メモリースライドショウやメモリーブックを含む）を活用するための、簡便かつ実用的な「読み」能力の評価法を開発する。
(2) この評価法を用いて，認知症の重症度の違いによる「読み」能力の違いや健常高齢者との違いを明らかにする。
(3) この評価法を用いて，ケアに用いる刺激を作成し，その有用性を明らかにする。

２．研究の進捗状況

日本語の文字体系に適した認知症向けの「読み能力評価法・試案」を作成した。認知症者の場合、検査の枠組みを理解することが困難なため、既存の検査では読み能力を正しく評価することが難しいことから，検査的な枠組みではなく、会話の中で、あるいはゲーム的な雰囲気の中で、認知症者の実用的な読みの能力を評価する方法を考案した。認知症者 6 名に対しパイロットスタディを行った。対この結果から、単語レベルおよび短文レベルでの内容の理解の可否、漢字への振り仮名の必要性の有無、さらにその人に適した文字サイズを、ほぼ判断でき、個々の認知症者に適した文字刺激を明らかにできるという感触を得た。また，本評価の前提として行う視覚スクリーニングの方法を検討し，本評価におけるヒント提示の順序性などの検査手順の詳細を決定した。

当初の試案をもとに，試案２を作成した。作成にあたって，適切な文字の配列や書体，高齢者にとって適切な刺激内容（単語・文）についての検討を行った。

文字配列と書体については，客観的評価（読み速度）において，文字配列・書体によって読み速度は変化しなかった。主観的評価においては，書体についてはゴシック体よりも明朝体が読みやすいと評価され，文字配列については明らかな傾向はみられなかった。

刺激内容について，検査者からの中立的な促しによって高齢者が容易に応答できる刺激，さらに「はい・いいえ」にとどまらない反応が出やすい刺激を，健常高齢者において検討した。試案２の候補として挙がったすべての短文・単語について，検査の手続きと同様の手続きで健常者に提示し，コメントを求めた。いずれの刺激でも健常者にとって応答しにくいものはなかったが，話題の広がりやすさ，応答の長さの点で若干の傾向がみられた。

以上の結果をもとに，「読み能力評価法・試案２」の刺激を選定した。

３．現在までの達成度

③やや遅れている

（理由）検査刺激の選定を根拠にもとづいて行うための手続きに時間を要した。

４．今後の研究の推進方策

「読み能力評価法・試案２」を完成させ，マニュアルを作成する。

認知症者に対してこの評価法を施行し，データを得る。このためには，研究協力者として，高齢者施設に勤務する言語聴覚士の協力を得てデータ収集を行う。

また，少数事例について，この評価法を活用し，臨床的介入を行う。

５．　代表的な研究成果

〔雑誌論文〕（計１件）
本多留美，Bourgeois，M. S.，綿森淑子
認知症の人の読み能力評価法開発の試み－実用性の視点から－
第 17 回言語障害臨床学術研究会発表論文集
査読有　2009 年　p.60-67

〔学会発表〕（計１件）
本多留美
認知症の人の読み能力評価法開発の試み－実用性の視点から－
第 17 回言語障害臨床学術研究会
2009 年 8 月 23 日　川崎医療福祉大学